

ル、エリスロマイシンなどを併用している場合、重篤な肝障害がある場合、また低カリウム血症、低マグネシウム血症、先天性QT延長症候群などがある場合、QT延長、心室性不整脈(torsades de pointesを含む)などの心血管系の異常をきたすことがある [医薬品副作用情報 No.130].

■ 戦略3：治療経過と予後

本疾患症状の未経験者には、たかが花粉症であるが、患者のシーズン中の苦しみは大変なものである。特に鼻づまりは睡眠を妨げることすらある。しかし、シーズンのあとまで尾を引くことはまず

ない。

重症例は、副鼻腔炎の合併の有無を含め、耳鼻科に依頼する。

ステロイド点眼液の使用に当たっては、緑内障に注意し、眼科に眼圧測定を依頼する。

文献

- 1) 真弓光文：小児科領域における抗アレルギー剤の使い方。日医会誌113：AR 67-69, 1995
- 2) 斎藤洋三(編)：アレルギー性鼻炎と花粉症の診療，国際医薬研究協会，1990
- 3) 馬場駿吉・他：花粉アレルギー—発症制御の進歩，第24回日本医学会総会，名古屋，1995

書評

瀬尾 攝・石川 高明 監修

産業医活動マニュアル (第2版)

近藤 東郎(慶応義塾大学医学部衛生学・公衆衛生学教室)

「産業医活動マニュアル」第2版が上梓された。初版が1991年9月だから、第2版を出すまでに月日はそうたっていない。初版本が大方の読者に好感をもって迎えられた証拠と考えられる。

さて、本書の内容は在来の記述の全面的改訂、増補に加えて「快適職場」という章を設け、さらに作業関連疾患について詳述している。すなわち、総論に始まって健康管理、環境管理、快適職場の理念と実際、作業管理、労働衛生教育、職場巡視の仕方、有害職場の産業医活動の実際、メンタルヘルス・ケア、健康保持増進と続き、最後に付録として法規および関連機関・施設を載せてある。これらの執筆者の顔ぶれは、大学で教鞭をとっている人から実務をこなしてきた経験豊富な産業医まで、たいへん豪華である。今の日本で、これ以上の面々を揃えることはなかなか難しい。したがって、書評も気軽に書くのは私にとっては骨が折れる作業である。誉めるのは面映ゆい。すべて同学の仲間だからである。さりとして、けなして済むようないい加減な仕事をする種類の人達ではない。だから、困るわけである。

あえていうならば、産業医学活動をこれから始め

ようとする一般診療医が通読するには、かなりの気力、努力を必要とするのではないかと心配するほど、本書は隅から隅まで親切にできすぎている。それは既に述べたように、執筆者をわが国の産業医学の専門家中の専門家で揃えたからである。逆に、それにしては実学の面白さが十分に出ていない。それは、本書が形を整えすぎていることに起因するのであろう。読後の感想としては、産業医学活動とは切れれば血が吹き出すものであることをもう少し初学者に強調しても良かったのではないと思う。なぜならば産業医学活動には、集団を対象とすること、疫学的手法を使用すること、法規制を遵守せねばならぬことなどのハードルがあって、それが多くの診療医に違和感を感じさせているからである。あまりにも辛いところまで配慮してあるので、つい余分な言辞を弄したが、本書の価値はそれによって毫も損なわれるものではない。否、それが本書の特徴である。

いずれにしても、本書の監修、編集に携わった瀬尾、石川、高田、野見山氏ならびに執筆者諸氏の努力を多として、推薦の辞としたい。

(B5判 478頁 6,592円(税込) 1995年 医学書院刊)